

## ポスト 2020 地域（アジア・太平洋）協議会合の報告

道家哲平（NACS-J）・名取洋司（CI-J）・三石朱美（JELF）

2019.1.31

会議名称：REGIONAL CONSULTATION WORKSHOP ON THE POST-2020 GLOBAL BIODIVERSITY FRAMEWORK FOR ASIA AND THE PACIFIC

会場：愛知県名古屋市国際会議場

日程：2019年1月28日から2月1日（最終日のエクスクーションは参加せず）

関連ウェブサイト：<https://www.cbd.int/meetings/POST2020-WS-2019-01>

### 概要：

- アジア（西アジア・南アジア・中央アジア・東南アジア・北東アジア）に加え、GEF、FAO、IUCN、Asean Center for Biodiversity、UNU-IAS、IPBES 等の国際機関の参加、海外の NGO としては、CBD アライアンス・GYBN、グリーンピース（中国）、WWF（中国）IIFB、日本の NGO として CI ジャパン、JELF（日本環境法律家連盟）、日本自然保護協会、バードライフ・インターナショナル東京、IGES、自治体として愛知県、企業として JBIB、経団連自然保護協議会などが参加。およそ 120 名程度。

### 成果：

- ポスト 2020 を検討する地域コンサルテーションの第 1 回としてアジア太平洋地域を対象とした会合が開催され、多様な意見が提示された。
- 参加者からは、非常に有意義な会合であったとして、日本政府・愛知県・CBD 事務局の主催者に対して感謝の意が評された。

ポスト愛知についての主な意見について（この会合は、多くの意見を出すことが中心のため、合意を得るものではない。多数意見をここでは列挙）

- ポスト 2020 は重要な目標である（総意）。もっと協議を深めていく必要がある。
- 愛知ターゲットの主な要素やフレームワークを維持したほうがよいという意見が大勢を占めた。
- ポスト 2020 の設定については、それをどう実施するか、実施のためのガバナンスは何が効果的かなどの意見が出された。意見としては、主流化・能力構築・レポーティング（報告）の改善・多様な主体の参加・（人・金・技術の）資源動員・地方自治体などとの縦の連携、指標群の設定、コミュニケーションの強化（ポスト 2020 そのものに加え各国での展開に向けて）など。

### 参加者による考察：

（道家）

- ポスト 2020 の最初のワークショップであったが、進行など改善点はあるもののスムーズに行われた。次の国家戦略の策定や見直しについても同様の参加原則が大事にされるべきと感じた。
- COP10 以降の日本の取り組み、にじゅうまるプロジェクト、UNDB-J(NBSAP の運営メカニズムや主流化推進策として) や、日本の企業の事例を紹介すると非常に興味を引いた。少なくともアジア地域では、生物多様性に関する企業との連携についての情報は需要（アジアへの波及）が高いと考えられる。
- ポスト 2020 の目標設定よりも、どう実施するかについての意見が多かったのが印象的。
- 生物多様性コミットメントについては、メリットや課題などについて、あまり話し合われなかったが、意見に幅があるように感じた。一方、多様な主体の参画を進めるという意味でツールとしての可能性は大いにある。そのため、最終日に、ポスト 2020 とは違って、2ndOEWG（2020 年第 1 四半期頃）までに国際社会に発信しないと効果的なコミットを集めるには、間に合わない旨発言を行った。
- グループワーク中、環境省スタッフもいる中で、日本の良い施策・悪い施策を話していたところ、休憩時間中に、中国 NGO（グリーンピース）から、どうすれば政府と是々非々の議論ができるオープンな関係性を構築できるのかという質問を受けた。この点で、NGO と中国政府との関係性が垣間見えた。この間に対する回答を行った後のグループワークでは、中国の NGO も積

極的な発言をするようになった。また、中国政府からは、これまで情報発信が不十分であったことを謝りたいと発言があり、COP15 に向けては情報共有と協働を進めていきたいとの発言が出て、COP15 をきっかけとした中国 NGO と政府との新しい関係構築の可能性を感じた。

(名取)

- 私は 3 日目までの参加。コミュニケーションと各セクターへの主流化が主要な論点であった印象。
- 誰もが分かるようなコミュニケーションや、様々なセクターに生物多様性を主流化しなければならないことについては参加者の総意とあってよいと思うが、科学的に示されている 2030 年までに生物多様性の減少を改善方向に向けなければ地球が危ういという危機感は議論からは感じられなかった。
- **Conservation, sustainable use** など、キーとなる用語の解釈が統一されていず、相対するもののように議論されることもあった。**Conservation community** の中でもコミュニケーションは重要と感じた。
- **Sustainable use** 偏重の意見もあり、やや気になった。
- 横断的な課題（コミュニケーション、能力構築、主流化など）のポスト 2020 での扱いについての議論では、単独の目標にしてしまうと、それだけ取り出して取り組まれてしまう可能性があるため、セクターごと、テーマごとの目標の中に指標のような形で取り組むべきと主張した。
- 資源動員については、突っ込んだ議論がなかったが、COP10、COP11 で暑い議題であったにもかかわらずその後十分なモニタリングがされていないことを考えると、COP15 での火種となる可能性がある。

(三石)

- 私は NGO として参加。先住民族の参加プロセスに関しては、ワークショップの参加締め切りが COP14 前だったことも理由か、IPLCs セクター内で COP 期間中に行った調整に対し、事務局からの連絡が錯綜した事もあり、参加者の地域バランスなどの要素が考慮されたとはいえ、実際のところ、混乱があった。
- 愛知目標の目標ごとの達成度についてはばらつきがあることは共通認識だが、個別目標の履行状況においても、現場ごとに目標の達成度、実現プロセスでの課題などに差がある。達成度が高いとみなされる目標においてもより詳細な段階化を図って、課題を精査すべきという点が共通認識化されなくてはならないという指摘が、先住民族などからなされていた。
- コミュニケーションの重要性については、特に各国政府からの参加者から政策決定者に対する **communication awareness** の重要性が指摘されていたのが印象深かった。また、ユースからは行政セクターと市民セクター以外にも立法、司法などにかかわる専門家たちに対する射程を意識づける必要があるという指摘もあった。
- 8 条 j 項、10 条 c 項などについては、条文が示す概念への理解がまだ不十分である国もあるという指摘もされており、この趣旨をどのように翻訳して個別目標の中に組み込むかという課題も指摘されていた。
- ジェンダーの観点においても **indicator** を組み込むべきとする意見もあった。
- COP15 の限られた時間の中で、新たな枠組みに交渉時間を費やす点への懸念も多く指摘されており、その点からもドラスティックな枠組み変更は歓迎されていないと感じた。

<b>開会式 Opening Session</b>	4
主催者挨拶	4
共同議長からのプレゼン	5
自己紹介	6
<b>導入セッション 現状と将来の傾向</b>	6
第6次国別報告書と GBO	6
アジア・パシフィック地域のための IPBES 地域評価(状況と傾向)	6
第6次国別報告書の成功と失敗 ケーススタディ	7
<b>2011-2020 からポスト 2020 枠組のための地域での機会と挑戦</b>	9
パネルディスカッションと質疑応答：地域のための機会と挑戦、未来の世界枠組のための洞察の提供(GEF, UNEP, FAO, UNCTAD, UNDP)	9
<b>初日の振り返りと二日目の進行紹介</b>	11
<b>ポスト 2020 枠組みに関するトランジション管理とツールを考える</b>	12
<b>私たちが望む世界像を作る</b>	12
<東アジア>	12
<西アジア>	13
<南アジア>	13
<東南アジアグループ>	14
<太平洋島しょ国> (東アジアもこのグループに含まれた)	14
<b>生物多様性の新たな物語づくりとコミュニケーション</b>	14
<b>SATOYAMA イニシアティブ・サイドイベント</b>	16
<b>二日目の振り返りと三日目の進行確認</b>	17
2019年1月ディスカッションペーパーの発表	17
<b>ポスト 2020 枠組みの要素</b>	18
グループ1 ポスト2020のストラクチャーについて	18
グループ2 主流化と連携	19
グループ3 資源動員と生物多様性コミットメント	19
グループ4 コミュニケーションと能力養成	19
グループ5 多様な視点の組み込み	20
グループ6 NBSAPとレビュー	20
<b>Transformative Change と愛知ターゲット</b>	21
<b>まとめ</b>	21
イベント全体の評価	21
共同議長の振り返り	22

## 開会式 Opening Session

### 主催者挨拶

開会あいさつとして、木内環境副大臣が挨拶を述べました。

会議への参加者や会議運営に携わった方への感謝と日本歓迎の挨拶ののち、COP10 がちょうどおなじ国際会議場で開催されたこと、ポスト 2020 にむけてこのような会合を開催するのは COP10 議長国としての役割であるとし、ポスト 2020 は非常に重要であり、目標・内容・枠組みなどについて理解が進むこと、とりわけ、生物多様性の分野の人だけでなく、一般の人々にも理解可能なものではなければならないというメッセージを共有しました。また、社会や経済に関する課題も食い込み、SDGS を実施にもつなげたものでなければならないとして、日本としての関心事項 3 点を紹介しました。

- ✓ SATOYAMA イニシアティブによる貢献を重要視
- ✓ 生態系ベースアプローチと、ECO-DRR
- ✓ 生物多様性の配慮をサプライチェーンや調達に組み込むことを重視。

最後に、ポスト 2020 の枠組みや理解について、この 4 日間で高め、実りある会合の成果を期待すると挨拶を結びました。



愛知県森田敏郎部長からは、COP10 の会場であること、当時使われていた木槌が展示されていることなどを紹介。COP10 では、愛知ターゲットを採択したことで有名であるが、同時に、地方自治体に関する決定も行われており、愛知県は GOLS を立ち上げた。この場でアジア・太平洋会合を開けるのを光榮に思う、この会合の支援について、全力をもってあたりたいとの発言がありました。



COP10 で使われた木槌

CBD 事務局長メッセージ（体調不良により参加できないがメッセージを代読）では、COP14 でポスト 2020 のプロセスが合意された。本日、その最初の一步が刻まれたことを歓迎し、私たちの課題に取り組むために、政府だけでなく市民団体、企業、専門家などとともに考えていきたい。COP10 の時の議長国のリーダーシップにより、愛知ターゲットや名古屋議定書をはじめ数多くの決定ができた。シャル

ムエルシェイク to 北京アクションアジェンダにも関心。JBF の支援への参加への謝意があった。

### 共同議長からのプレゼン

次に共同議長のカナダのバージル氏と、ウガンダのオグワル氏から共同議長の役割について説明が行われました。



オグワル氏は、COP10（2010年）の交渉に実際関わっていて、採択された時のことを今でもはっきりと覚えているということ、再びここにきて、次の目標づくりに携わるとは思っていなかったという感慨を述べていました。

議長としての役割としては、ポスト 2020 に関する合意形成のためのファシリテーションと意思決定を可能とする条件づくり、各国の意見表明の機会づくり、COP において正しい課題に取り組めるように参画、コンセンサスに到達するための条件整備、プロセスを政府や市民社会や IPLC や NGOs によって理解され、サポートされるようなプロセスとすることと紹介しました。

また、プロセスについての諸原則の紹介。強調したのは、COP15 に向けて、グッドウィル（良い意思）を構築することや、目標への当事者意識の醸成、クリティカルな課題を絞りそれを可能な限りの程度で解決するよう努力することが重要（全部を解決しようとしてはいけない）

#### <プロセスについて>

- アジア・太平洋を最初に各地域で意見収集のためのコンサルテーションを実施。全地域を 2019 年 4 月末までに終了させる予定。出された意見をもとに、キーメッセージを特定したペーパーを作成。そのペーパーを元に、特別作業部会（OEWG と略す）は今年の夏（できれば、モンリオール以外の場所で）開催を検討している。
- 同時に、テーマ別課題の検討のフェーズも考えている、ここでは、既存のプロセス（DSI など）と重複しないようにしつつ、ポスト 2020 に検討結果が反映されるようにする。
- OEWG は、2020 年の最初と、2020 年夏のサブスタのあとに開催するアイデアを持っている。

#### <意見の扱い>

今回は、多様な意見を収集し、取り組むべき課題を特定するため、交渉のポジションを議論するものではない。NGO 等の意見についても、締約国のサポートは不要である（COP の交渉では締約国のサポートが必要）。あらゆるグループに対して、オンラインディスカッションも通じて、意見を出すことを期待する。

#### <ワークショップのまとめ役の選出>

今回の地域ワークショップのコーチアートを 2 名指名。COP ビューロ（運営委員会）からは、星野一

昭氏（鹿児島大学）と、リナ・アドワーディ氏（クウェート）を推薦し、会場から支持された。また、オーストラリアのローズマリー氏が議事録係として指名された。

また、プログラムについて紹介が行われました。プログラム（英語）はこちら。

## 自己紹介

参加者の自己紹介のセッションでは、他己紹介（コンビをつくり、互いのことを紹介しあう）を採用して行われました。この会合への期待として出てきたのは下記のようなテーマです。



資金メカニズムとポスト愛知の関係、気候変動との連動、SDGs との連動、企業の巻き込み、小島しよ国の課題、各国における愛知ターゲットの実施状況、ポスト 2020 についての多様な意見の把握、COP15 に向けた準備、COP15 に向けてどう市民社会を巻き込むか、ユースの声を反映させること、農業関連の施策とポスト 2020、主流化の進め方、ジェンダーの視点の組み入れ

## 導入セッション 現状と将来の傾向

Introductory session: “Current State of Affairs and Future Trends”

### 第 6 次国別報告書と GBO

- 6NR and GBO (CBD Secretariat)

生物多様性の現状について：

GBO4 の成果では、レスポンスは増えているけれど、生物多様性へのプレッシャーも上昇し、損失、生態系サービスの損失が継続。第 5 次国別報告書からも、良い事例は生まれているけれど、不十分であるというピクチャーが浮かび上がった。ただ、シナリオモデルによると、保全のための合理的な手法は存在する。生産と消費、農業生産性の向上、保護地域などが重要な手法とされている。

2050 年のシナリオに関して言うと、2050 年ビジョンは妥当であり、良いビジョンである一方、実現に向けては社会経済的手法や、変革が必要。GBO5 が重要な文書となるが、そのためにも、第 6 次国別報告書が非常に重要な情報源になるので、提出をお願いしたい。

### アジア・パシフィック地域のための IPBES 地域評価(状況と傾向)

- IPBES Regional Assessment for the Asia-Pacific (Status and trend)

アジア地域太平洋のレポートの紹介が行われた。

アジアは生物多様性も生物文化多様性という視点からも重要な地域。45 億人の人口を抱え、経済が、年平均 7.6%（1990-2010）で上昇している。4 億人以上が一日 1.9 ドル以下で暮らしており、地球全体の貧困層の 52% がアジアに住んでいる。多くのアジア地域は生態系サービスの維持を考えないといけない。

生態系の規制サービスも忘れてはいけない。湿地や森林生態系の規制的サービスの重要性は高い。

アジア太平洋地域の生物多様性や生態系のトレンドは減少傾向。東南アジアの絶滅危惧リスクが高い



(特に、固有種の危機度が高い、東南アジアでは 45%)。保護地域も拡充しているけれど、重要生物多様性地域 (KBA) のカバー率が低い。

危機要因としては、気候変動、土地利用の変化、過剰漁獲 (アジア地域の、40%から 70%の漁獲量が減少中)、外来種、廃棄や汚染など。シナリオ検討によると、間接的要因が大きな問題であることと、要因と喪失の関係性が複雑であるため更なる検討が必要

SDGsに基づく示唆として、これまでと同じ (BAU モデル) では、2050 年までに、45%の種や生態系が失われ、90%のサンゴが劣化。ポジティブな傾向としては、保護地域の拡充 (森林伐採などの抑制) が言える。今後さらにパートナーシップが重要となる。生物多様性の健全性が脆弱であり、普及啓発の重要性、継続している古いドライバー (開発) の影響が残っている。

#### 第 6 次国別報告書の成功と失敗 ケーススタディ

##### - Case studies of successes and failures from 6NR

中国 (発表者は、Xu Jing 氏) : 生物多様性国家戦略 (NBSAP) は 2011-2020 という枠組みで設定。再生や国家戦略などに進展があるが、外来種やサンゴ礁 (AT10)、絶滅危惧種などに課題あり。主流化は進んでいて、生態文明 (人と自然の共生や、生態環境の保全) を国家主席も提唱しているほど。省庁再編なども実施し、自然資源省と生態環境省に整理した。

実施政策として、空間計画に関する経験、31 の州でレッドラインという保護のためのコリドー (と思われる) の設定計画や、自然保護地の再整理なども。生態系復元や保全の取り組みも盛んである。進捗をはかるためのパフォーマンスアセスメントの仕組み。国際協力も活発に行ってきた。

教訓として

- 1 社会経済的発展と保全の衝突、②資金メカニズムの限界、③科学的技術的サポートが必要、④普及啓発や参加型で進める能力の拡充

結論 : 主流化の重要性、高いレベルの政治的なサポートの重要、各国のベストプラクティスの共有が重要、財政資源や技術、能力養成が重要 (最後の部分がトッププライオリティ)



生態文明 (Eco-Civilization) を主唱する周近平国家主席

日本 : 半年程度に及ぶ準備の過程を紹介。愛知ターゲットをもとに国内目標を設定し、かつ、指標を設定し、評価したことを紹介。13 の目標に 48 のキーアクション、81 の指標を設定した。

指標毎に改善状況 (や悪化の状況をチェック) を確認して、進展度を測ることをおこなった。生物多様性の日々の活動 (現場での悪化の感覚) と、指標だけのチェック状況 (非常に進展しているような感覚) にギャップがあることも紹介。

結論として、①設定した指標による評価の限界、②ステークホルダーとのディスカッションの重要性、③次の NBSAP での指標設定の重要性、④活動の継続性の重要性、⑤進展しているが不十分についてももう少し詳細な達成度の状況などをレポートできるとよい、などの指摘をしました。

カタル：愛知ターゲット含む、進捗状況について報告。

生物多様性の危機として、海洋生物多様性では過剰捕獲、非持続可能な観光業、水資源管理、陸上生物多様性については、放牧に伴う汚染など、陸地では過放牧や、捕獲、植生カバーなど。共通の課題として、理解の不足、生物多様性情報のギャップ、専門的人材の減少、気候変動、都市化などがあることを指摘しました。

その後、愛知ターゲットごとにどんな取り組みが行われているかなどを紹介。ABT1 については、普及啓発キャンペーン（環境の日）、国際生物多様性の日、野生生物の日などや、外来種（ABT9）Qwait Tree (*Prosopis Julifora*) のコントロールなど。加えて、保護地域や生態系復元などの実施状況、生物多様性に関する科学的知見の向上などについての取り組みなどが紹介されました（進展などについては詳細に語られませんでした）。

最後に、生物多様性に関する資源の増加の必要性、能力養成、持続可能な利用に関する能力養成などが重要と結論付けました。

サモア：NBSAP は、2015-2020 という期間で設定。2018 年 9 月から 12 月にかけて 6 NR の作成に従事、Steering meeting などや利害関係者のワークショップなどを実施した。UNDP のチェック終了後結果報告の予定。

愛知ターゲット越えや達成が 36%、不十分が 40%近く、20%近く進展なしなどの評価となった。消費などについて、木材輸出が危機という状況を脱し、プラスチックの輸入禁止等が責任ある消費などの事例とされるなど進んだ部分もある。外来種についても、主要な侵入経路などを特定、保護地域については保護地域数は増やすものの、効果的な管理などは不十分。絶滅危惧種などはほぼ変化なし。海洋については情報が無い。

教訓：いくつかの指標が NBSAP のターゲットと関係が不明、情報共有の不足など。国の事業などで生物多様性の価値についての理解度を測る調査や GIS を使った空間的なモニタリングなどが必要。愛知ターゲットの 60%くらいは達成しそう、普及啓発や外来種など進展が今後もありそうな目標もあり。生物多様性に投資することが決定的に重要。

タイ：プロセスと主要な発見事項と、教訓について。調査のために、GEF とタイ王国政府からの資金を獲得。植物保全戦略などの状況も調査。25 のナショナルターゲットを設定し評価を実施している。植物保全戦略についても、各目標に対して、実施状況を調査している。ローカルコミュニティの参加も奨励しており、ABT5,13,18 などについて地域の支援について述べている。最後にカントリープロファイルの更新なども行っている。

経験から教訓については、情報が多くあったり、持っている情報に制限があるなど情報ギャップが存在すること、指標や実施についてもっと工夫が必要だという意見が出ました。

ランチには、愛知県大村知事が訪れ、愛知県の取組や GoLS の取り組みなどを紹介した。





## 2011-2020 からポスト 2020 枠組のための地域での機会と挑戦

“Opportunities and Challenges in the region from 2011-2020 for the post-2020 global framework”

10 人程度のグループワークを通じて機会について議論された。

IPBES の結論を見て、この地域での自然との共生や持続可能性を手にする方法

実施についての経験 何が手助けになった、何が起こらなかった、どう改善するかなどについて話合われた。

機会—この地域をもっと持続可能なものとするために

- 豊かな生物多様性
- たくさんの保護地域（効果的な管理、参加型の管理、保護地域の周辺を組み込む地域）と空間管理の視点、保護地域については海洋が伸ばしどころ。High value area や key biodiversity area などのカバー率を高める工夫。Community driven の保全手法をアジア地域はもっとハイライトすべき。ターゲットは各国で十分にコミュニケーションされていないため、各国から世界の保護地域に貢献する仕組みを作ることが重要
- 先住民地域共同体、NGO や企業の参画、
- 効果的な法制度の存在や、既存の法律の効果的な実施、
- CEPA や普及啓発、
- 生物多様性の主流化、
- 実施を支援するガバナンス・体制、
- 伝統的知識の活用、
- 多国間条約間の連携、特に、リオ条約間の連携
- 実施の強化、
- 人々の生物多様性保全への意思や政治家（Policy Maker）への影響、
- 財政的支援。

課題

- 保護地域の管理チームの充実
- 人口増
- 報告書のシンプル化。NR の提出をもっと厳格に。
- 指標をもっと関係の明確で、入手可能なものにする。良い指標の仕組み。モニタリングや評価のための仕組み。
- ナショナル・コーディネーション、ABT のためのナショナルコミッティーのような仕組みが必要。
- 数的ターゲットと定性的ターゲット。
- 貧困とジェンダーの課題を組み込む必要。
- SDG s 目標との効果的な連動
- マルチセクターアプローチを組み込む。
- 資源動員。
- 生物多様性上重要な地域と持続可能な利用の関係。
- 開発セクターへのコミュニケーション。
- 自然資本への投資。
- 愛知ターゲットが機能したところ どうすれば NBSAP を実施・機能させるか。

パネルディスカッションと質疑応答：地域のための機会と挑戦、未来の世界枠組のための洞察の提供 (GEF, UNEP, FAO, UNCTAD, UNDP)

- Panel discussion and interactive Q&A: opportunities and challenges for the region, providing insights for the future global framework (GEF, UNEP, FAO, UNCTAD, UNDP)

GEF の期待

- 現状の戦略計画は、CBD の実施の在り方を大きく変えたけれど、さらに変化をもたらすことが考えられる。どう、伝統的な保全から、インパクトのある手法も取るようできるか考えたい。
- GEF では、保護地域から主流化に資金投資テーマが移動しつつある。引き続き主流化に投資を継続する予定。エネルギー・インフラなど社会経済的な領域に関心。また、ターゲット2の経済価値評価や国家勘定に組み込むという発想はむずかしいが、多くの団体が取り組んでいるイニシアティブも伸ばしたい領域である。この二つの領域が重要なテーマ。
- 目標そのものもコミュニケーションしやすいものに変えていく必要がある。

#### UN-Environment :

1. 自然資本会計：これまでは生物多様性の政策や目標は経済から独立して作られてきた。この弊害を是正するために自然資本会計は重要。
2. 認証などの調達：ForCES(FSC) sustainable tea landscape Sustainable Rice Platform
3. 革新的財政： sustainable land use financing initiative。自然資本ファイナンスアライアンス
4. 統合的アプローチ：NBSAP の実施のための多国間条約フォーカルポイントを集めた会合の実施によって統合的な実施が可能となる

などの4領域が注力している事業領域である。

- 結論として、①条約を超えた変化が必要、②革新的変化のためのコンセプトやアプローチにフォーカスする必要性、③自然資本のより有効な組み込み、④NBSAP の改善の選択肢の模索、⑤条約間シナジーの追求が重要と指摘した。

#### FAO:

- 生物多様性主流化プラットフォームというのが立ち上がり力を入れている。農業における生物多様性の主流化は、協働的に（コレクティブ）に実施されなければいけない。政府だけのパースペクティブだけで議論してはいけない。主流化を議論した COP13 カンクンのフォローアップに力を入れている。生物多様性主流化プラットフォームを立ち上げることを2019年のFAO総会で決定し、企業との対話が初めて議論された。FAOの生物多様性戦略を策定。ファンドをてこにして高い効果（インパクト）を出す必要がある。FAO生物多様性戦略の検討のプロセスに参画してほしい。

#### UNDP :

- スcopeやスケールの視点を強化するべき。
- 生物多様性と気候変動もっと両立実施できる体制をつくる必要性
- 保護と復元の力をもっと高める
- 生態系サービスを提供する資本としての自然の認識を高める必要。
- 消費と生産のパターンへの取り組みが重要

#### テレサ・ムンディタ・リム ASEAN CENTER FOR BIODIVERSITY :

- OECMに可能性を感じている。
- アセアンヘリテージパークというネットワークがあり、それぞれコミュニティーがあり、生物多様性に配慮した製品がアセアンヘリテージパークに存在。このような製品をハイライトすることで、人と自然の共生というビジョンに貢献できる。
- 課題として、どうこれまでアプローチできなかった企業のようなネットワークと協働するのかということを考えたい。

#### その後交わされた議論

- 生物多様性の経済評価、UNDPなどの国際機関のチームでSDGsの文章起草が行われたことなど、国際機関の役割と締約国との関係についてが意見が出された。
- パートナリシップやコラボレーションについてたくさんの議論が出てきたという印象を持った。エージェンシーや企業や自治体やIPLCなど。社会のアラームにどう適切に答えるかという意識

が生まれている。どんなリソースがあるのか、どう人々をモチベートするかという議論も話合われた印象も強い。



左から、GEF、UNEP、FAO、UNDP、ASEAN からの参加者

初日 18 時より、愛知県主催によるレセプションが開かれた。なごやめしをはじめとした食事（ベジタリアン用も用意）やティーセレモニーなども開かれ参加者もリラックスした雰囲気に参加をしていた。会場には、命つなぐプロジェクトの学生メンバーが参加し、海外の方との交流や、2 月 1 日のエクスカージョンの B コース（知多半島生態系ネットワーク協議会の活動視察）の案内などを行っていた。



#### 初日の振り返りと二日目の進行紹介

ポスト 2020 ワークショップ二日目は、一日目の振り返りから始まりました。

出された意見は下記のようなものです。

- ✓ コミュニケーションの役割の重要性。
- ✓ トランスフォーマティブチェンジというキーワードについての理解を深めること。
- ✓ あらゆるセクターの参加の重要性。
- ✓ 第 6 次国別報告書が印象的、各国の情報がもっと集まるとよい。
- ✓ 経済等に関わる行政や企業などの参画の重要性を感じた。
- ✓ 企業の参画などをどのようにターゲットと行動に結び付けるかという課題を感じている
- ✓ 第 6 次国別報告書のレポートは重要。一方で、多様な結果が見られたが、そこからワンメッセージを引き出せるだろうか、考えを深め、みんなともっと話し合いたい
- ✓ 愛知ターゲットの知識はあるけれど、それを自分事化するのには、実践をすることだと感じた。

## ポスト 2020 枠組みに関するトランジション管理とツールを考える

### “Thinking, transition management and tools for the post-2020 global framework”

- ✓ このままでは、人と自然の共生は達成しないことが IPBES の報告などから出ている。CBD の外側のセクター、例えば、世界経済フォーラムのグローバルレポート（ダボス会議）の調査でも、環境の課題が、経済発展の大きなリスクとして認識されていることなどを指摘。
- ✓ 2030 年までに聖遺物多様性の損失のカーブを上を反転させる（ベンディングカーブ）を始めないといけないという科学からの指摘があることなども紹介された。
- ✓ 今後必要なこととして、科学が、従来、生物多様性の損失が起きてることを明らかにする研究をしていたが、今後は、損失を進める圧力や原因、生物多様性を失う（失っても何も行動も、警告も出さない）システムの検討が必要であること、経済社会科学の活用、新しいアイデア・技術をもっと活用する必要性などが結論付けられました。
- ✓ 生物多様性におけるトランジションに関して言うと、活動+コミュニケーション+ランドスケープレベルの変化+トランジションを導くミッションや原則や過程（Path way）が必要で、ビジョンからのバックキャストの発想や、新しいアイデアの活用などが考えられるとの指摘がありました。

## 私たちが望む世界像を作る

### “Visioning the world we want”

トランスフォーマティブや 2050 年ビジョンに関するサブリージョンでの意見交換（グループワーク）が行われた



## <東アジア>

### 2050 ビジョンについて

- 東アジアグループ（TEM ですでに顔見知りもおられるよう）では、2030 年までは経済発展の勢いが止まらない中国、生態系サービスなどの概念が法律に組み込まれ、法制度の環境法化（法律レベルでの主流化）が起きつつある韓国、経済発展も環境法の整備や環境視点の組み込みがなされたが、人口減少に直面しある意味トランスフォームが起こっている日本、など状況が異なることを共有。
- 外部（UNDP）からは、フットプリントや森林資源の輸入・プラスチックの廃棄などの原因となっている東アジアの視点が重要であるという指摘もあった。

### その他の意見

- SDGS のようなヘッドライン+コミュニケーション戦略、

- エビデンスベースドの目標の重要性などが指摘された。
- **Nature Based Solution to SDG s** がコストエフェクティブであること、政治家の巻き込みの重要性という議論もあった。
- 目標とその背景にある問題についての関係性が分かりにくい。GEF のような投資機関としては、目標の背景にある問題へのアプローチ（原因を解決する）や、目標達成の阻害要因を取り除くような効果的な投資が重要である

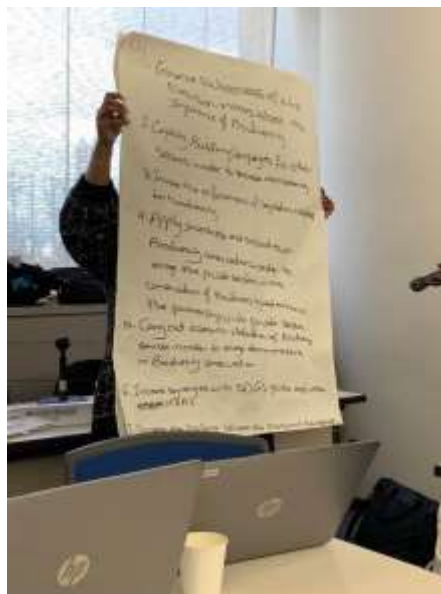
その後、グループごとの発表が行われた。

### <西アジア>

1. 意思決定者への普及の強化
2. 他のセクターの能力養成キャンペーン 特に主流化
3. 法律の強化
4. 生物多様性への補助金等の改良 政府と企業の連携の仕組みとして
5. 生物多様性の経済評価の実施
6. リンク
7. 経済発展と環境の持続可能性の連携
8. モニタリングや EIA の強化
9. NGO やユースや女性の参加が重要

### 2050 ビジョンについて

- 土地の劣化無し、もっとグリーンスペースが生まれる、サステナビリティの視点の推進、革新的な技術の活用、絶滅ゼロ、30%の海洋保全、AI の活用（ブロックチェーン、何かの技術）などの意見が出た。



### <南アジア>

- 生物多様性のロスに取り組む 課題（貧富の差、情報や知識のギャップ、時間をむだにしてはいけない、財政資源、技術移転の不足、実施のための **Institutional Capacity**）などの課題を整理。
- 
- 新しい課題（新しい汚染、マングローブや山岳など気候変動に脆弱な生態系、ABS の法制化、技術移転、野生生物との共存、**Migration**、人権侵害、自然災害）にも取り組むことの重要性を指摘
-

- 変革はどんなものか
- 効果的な実施につながるファクターが重要、システムチェンジ、マルチレベルのガバナンス、戦略、Adaptation、ツール)、人権を包摂
- 実施のツールや手法については、IT テクノロジー、コミュニティに注目したインディケーター、バッファゾーンのマネジメント、OECM の認識、持続可能な資金、コミュニケーション戦略などが重要ではないかとの意見が出た。
- 
- 2050 年へのアクション：リオ 3 条約の協働などが重要とした

#### <東南アジアグループ>

- 目標への当事者意識（環境省だけでなく、他省庁も）。
- SDGS とのリンク、国境横断型の協力、コミュニケーション、ビジネスセクターやファイナンスセクターを早い段階で巻き込む。保護地域の量的目標設定、土地の所有権の管理、経済的価値化や他のセクターにとってのベネフィットなどの重要性などが話題に上った。

#### <太平洋島しょ国>（東アジアもこのグループに含まれた）

- 全ての Decision において生物多様性が考慮されるようになっていくことが Vision (Environment--biodiversity--is embedded in all decision-making)
- 変革的变化について国レベルで何をやるかということをもっと突き詰める必要、
- 愛知ターゲットのコミュニケーションの難しさ。ビジョンが具体的になることが重要。
- もっとアクティブな言葉に変更する（受け身形の目標では行動主体が不明確）。G20 などで生物多様性のことがもっとハイライトされるようにしてはどうか。愛知ターゲットの改定にあたっては、メッセージを伝えたいグループを絞りこむことも重要
- Conservation だけでなく Sustainable use も（ここで言葉の定義の共有が不十分と感じた）
- 税制を改革し、環境への負荷が値段に現れるようにすべきという議論もした。

#### 生物多様性の新たな物語づくりとコミュニケーション

##### “Shaping and communicating new narratives for biodiversity”

各主体からのプレゼンテーションが行われた。

#### <CBD アライアンス>

- 先住民は、世界の 5% の人口にも関わらず、6000 の言語の 75% を保持し、知識と文化という視点でも 80% の生物多様性が共有地から見いだせる。世界の陸地 50% が共同管理ただし法的には 10% しか所有していないなど、機会と課題にあふれているセクター
- IPLC は、流域の保全、脆弱な生態系の取り組みも実施。土地との親密な関係性、ガバナンスシステムとの関係性も重要。
- Territories of Life (ICCA) そのためにも生物多様性のディフェンダーを守ることの重要性。25 億人が共有地に依存している。
- ジェンダーアクションプランを 2010 年・2014 年（継続）に採択。ABT 14 に言及、NBSAP に言及無し、実施のための行動の詳細が欠けている、知識や実践に対して認識するためのガイダンスがない。今後、ジェンダー・生物多様性リンクの普及、OEWG への参加、ジェンダー配慮の指標の開発が重要とまとめた。

#### <UNU-IAS>

- Landscapes and Seascapes Approach というテーマで、里山イニシアティブについての説明が行われた。SEPLS(社会経済的生産ランドスケープ)の重要性と SATOYAMA イニシアティブが貢献している事、とりわけ、伝統的知識とグッドガバナンスや公平性、教育などの重要性について紹介があった。
- このテーマでのテーマ別コンサルテーションの開催計画を発表。2019 年 9 月の早期に熊本で実施予定



### <自治体・愛知県>

- 地方自治体の役割と可能性について説明。
- 愛知県では、森林再生や、河川における環境配慮の工事、愛知のミティゲーション方式、生態系ネットワークや生態系ネットワーク協議会（9ブロック）などの取り組みを紹介。
- COP12 の後で Group of Leading Sub-nationa (GOLS) 1 というネットワークを作って、自治体での協働を推進している。GOLS は、エナジーフォーサステナビリティや ICLEI と協働して、自治体に関する助言委員会の設立を COP14 で発表した。
- ポスト 2020 に対しては、①国—自治体の縦の主流化の重要性、②ターゲット 17 に自治体の目標を、③自治体の行動計画の更新が必要
- ①自治体の重要性、②国—自治体の縦の一貫性の重要性、③自治体はポスト 2020 に貢献する準備、④自治体を巻き込むと取り組みの水平的展開を作り出すことができることを提案した

### <先住民 (IIFB) >

- LBO の紹介
- 生物と文化の多様性が社会や経済のレジリエンスを高める
- IPLC の協働型の行動が重要ではないか、IPLC のサポート＝地域・コミュニティーベースの活動推進につながる。
- 5 つのサークルモデル— 生態系と経済の多様化、コミットメントの調和、生物文化多様性、法的多元性（価値やガバナンス、仕組みなどの多様化）、社会・経済的な視点の統合。
- 法律も、あったとしても、運用や強化が不十分であったり、法律の下での政策決定が不公正であったら問題である。

### <Youth>

- GYBN の説明、生態系の健全性が失われたら、ユースがもっとも悪影響を受ける。世代間責任の話。ユースは政治システムやリーダーへの信頼を失いつつある。ポスト 2020 の前と後と分けることはしてはいけない、ブリッジが必要。ラチェットメカニズムがモニターという意味でもアンビシャスの増加でも必要。ユースは重要なパートナーであると思う。価値を考えることが重要であると提案した。
- ポスト 2020 はボトムアップアプローチが重要、ユースは巻き込まれなければならない、ユースを戦略的なパートナーとして認識する必要がある。ユースはコミュニケーションだけでなく、アクションという面においても政府が苦手なことができる存在になると指摘した。



### <JBIB 企業の視点>

- なぜ生物多様性への参画が遅いのか？
- 生物多様性の理解が難しい。重要性やビジネスとの関係性が不明＝新しいナラティブが必要。
- ツールの開発を行った。関係性マップやドライビングコンセプトの開発、生態系サービス・依存と影響・自然の価値・サプライチェーンの影響・自然資本会計
- 5 つの分科会で、ガイドラインやガイドブックなどを開発。ESG やプラスチック。ゼロ森林宣

- 言の支援。(ゼロ宣言そのものはできなかった)。雇用者や子供向け教育プログラムの実施。
- ABINC の生物多様性に配慮した事業所のガイドラインと認証制度による、生物多様性の保全や復元に新しい価値を作ろうとも試みている。
  - コモディティのカバー、企業の決定や管理の主流化、持続可能な消費や生産
  - 質疑応答：企業へのアプローチを洗練化する方法は？企業は個々の企業で非常に多様な視点と戦略がある
  - 環境のためのビジネスというものは、企業にとって重要な戦略となりうると思うか？成長しているが、まだ遅いと思う。加速するためには、インセンティブ、消費者や NGO からのプレッシャーなどが重要ではないか。
  - なぜビジネスか？ 企業は多くの自然資源に依存し、自然資源に影響を与えるから という答えではないか。
  - 話を聞いてみて、多様なレベルでの責任（レスポンスビリティ）が重要と感じた。
  - GYBN に対しては、毎年・毎年大きな声になっていて、政府団にもいつか加わってもらいたい。他の UN ユースグループと活動しているかどうか、気候変動や農業などのフォーラムにもいるユースとの連動も重要ではないか。
  - セクター間のコラボレーションについてもっと議論をすることが重要。

#### コミュニケーション：

- ポスト 2020 プロセスの中でコミュニケーションが重要。
- **Barriar to Action** が数多くあり、専門家との議論が進んでいる。
- 生物多様性について関心（Excite 興奮？）を持ってもらう、コアリションを広げる。IUCN-CEC ではハートに訴えることの重要性が指摘された。
- オープンソースモデルも重要な手法ではないかと考える。
- 国際生物多様性年、SDGs のコミュニケーション戦略も参考。
- シャルムエルシシエイクから北京へのアジェンダ Shar El-Sheikh to Beijing Action Agenda for Nature and People の有効活用
- コミュニケーションに資金があるのか？
- 補助金などの変革
- ポスト 2020 にとって、どう目標の設定に意味があるのかと、ポスト 2020 の普及啓発の両方を考える必要。

#### コメントとして下記のような意見が出された。

- コミュニケーションについては、ターゲットオーディエンスの特定が重要で、そのターゲットに向けてターゲット層が持っている価値観も参考に手法などが出てくる。ポスト 2020 も、誰をコミュニケーションターゲットにするかということをお話することが大事
- **Choice Architecture** の考慮
- 効果的なコミュニケーションについて、IUCN-CEC がオンラインツールを提供している
- NGO のコミュニケーションキャンペーンの能力を活用することができる。
- 魅力的なメッセンジャーの考慮が重要
- プラットフォームの有効活用、マルチメディア（ネット、ビデオ、・・・） オンラインの発信とオフラインの行動など
- ユースへの期待 ユースがマーケットを動かす
- 生物多様性のコミュニケーションは、テクニカルタームに集中していた。NGO はそれをいろんな形で翻訳していると思う。
- ポスト 2020 の形成プロセスそのものもコミュニケーションの大きな機会であると思う。

#### SATOYAMA イニシアティブ・サイドイベント

国連大学サステナビリティ高等研究所（UNU-IAS）、地球環境戦略研究機関（IGES）、コンサベーション・インターナショナル・ジャパン（CI ジャパン）が標記サイドイベントを開催した。参加者 60 名。

- IGES・武内和彦氏が SATOYAMA イニシアティブ全体を紹介。
- UNU-IAS・イヴォーン・ユード氏が、NBSAP におけるランドスケープの取り扱いに関する研究を報告。
- IGES・高橋康夫氏が、SATOYAMA イニシアティブのシード活動を資金的に支援する Satoyama Development Mechanism の取り組みと愛知目標への貢献について発表。
- CI ジャパン・デボン・ダブリン氏が、地球環境ファシリティの支援を受けて実施している GEF-Satoyama プロジェクトの概要を紹介し、支援している世界 10 か国 10 件のプロジェクトとそれらを対象とした研究活動から得られた **Lessons learned** を発表。
- CBD 事務局ジョティ氏、カンボジア・ソマリ・チャン氏がコメントを述べた。

会場からは、UNESCO MAB との連携をすべしとの意見、SATOYAMA イニシアティブからは科学的な裏付け・実証はあるのかという質問があった。また、Sustainable use を強調していたことに懸念を持ち（保護地域から意識をそらしているという印象）、保護地域についてももっと目を向けるべき、という趣旨の発言もあった。SATOYAMA イニシアティブのイベントでは、内輪の人が集まることが多く、イニシアティブの外の人が参加して意見を述べる機会は貴重であった。

## 二日目の振り返りと三日目の進行確認

1-2 日目の振り返りのコメントが行われた。出された意見は下記など。

- バージル：非常に重要な議論をしているが、プロセスを失いやすい（どうコメントを、文書作成につなげるかという視点にならない）ので締約国としてどんなテキストが欲しいかということについて常に意識し、目的に戻る必要がある。まだ声を発していない人がおり、その方のコメントも個人的にお聞かせしてほしい。
- IUCN 古田：2009 年に神戸で議論したことと重複することが多い。10 年前と同じ議論をしている。どうその問題をブレークスルーするかが重要。
- ブータン：NBSAP が非常に重要なツールである。この NBSAP を効果的に生かすことが重要。
- スリランカ：NBSAP は 2022 年が期限となっている。問題も大きな変更がない。

## 2019 年 1 月ディスカッションペーパーの発表

### Presentation of the January 2019 Discussion Paper

CBD 事務局のジョティさんより、これからのスケジュールについて紹介がありました。

#### 2019 年

- 3 月 ボンでヨーロッパ会合、その後、アフリカ、グルーラック、CEE と地域コンサルテーションが続く
- 5 月 IPBES の生物多様性と生態系サービスに関する世界レポートが発表
- 6 月 トロンハイム（ノルウェー）で、地域会合の成果をもとに、意見交換の会合が開催予定
- 7-8 月 1st OEWG を開催したい（場所と予算は未定）
- 11 月に SBSTTA23 と 8 (J) 会合実施予定 GBO5 ドラフトがここでお披露目予定

#### 2020 年

- 1-3 月 2nd OEWG を実施
- 5 月 SBI と SBSTTA24 を開催 GBO5 の発表が行われる
- 6 月 IUCN-WCC フランス・マルセイユ
- 7 月 3rd OEGW
- 9 月 国連総会 (UNGA) Nature Summit の開催—UNGA の決議は通った。
- 10 月 CBD-COP15

星野共同議長から、下記のような点が印象に残っていると紹介された。

- 理解を進めることを意識したポスト 2020 の構造について
- 多様なセクターの参画、企業など、

- コミュニティーベースドコンサベーション
- SATOYAMA イニシアティブや持続可能な利用
- 透明性の向上

ディスカッションペーパーの説明：

- 文書の性格や、プロセスを進めるために各所に「キーとなる質問」が存在することや、関連決定（CBD-COP14/34, BS9/7、NP3/15、CBD-COP14/20DSI.22 資源動員.23GEF.24 ステークホルダーとテーマ別WS.3 主流化.30 条約間連携.IIPBES）などが紹介された。
- 2018 年末に求めた意見照会のサマリーが組み込まれている：
- 3 つの CBD の目的、概念枠組み、人と自然の共生に向けた 2030 ミッション、SMART ターゲット、指標も同時に開発、当事者意識の醸成、効果的な実施の仕組み、NBSAP の多様性、コミュニケーションやアウトリーチ戦略の重要性、ジェンダーの組み込み、生物多様性の主流化の組み込み、ギャップの特定などが書かれている。

ポスト 2020 枠組みの要素

“Elements for a Post-2020 Framework”

その後、1 グループ 30 分程度の時間を使いながら、6 つのグループにわかれ、ポスト 2020 についての意見交換を行った。



グループ1 ポスト 2020 のストラクチャーについて

- ジェンダーや議定書をどう組み込むかなどが焦点として議論された。
- 3 つのシナリオがありうる一枠組みそのものを維持、わずかな修正、完全なストラクチャー変更。
- アンビシャスな目標とプログラム、かつ、リアリスティックな目標のバランスを取ることが重要。
- 横断的なプログラム・ターゲットの設定が必要。
- オペレーション・ファイナンシャルメカニズムが必要。
- ABS や関連する伝統的知識は各国の対応状況が不十分であるためターゲットに入れた方がよい。
- 遺伝子組み換え（BS）は言及は必要であるが、ターゲットに入れなくても良いのではないかと  
いう意見が多かった
- ECO-DRR などの要素として欠けているテーマがある。
- データの不足
- As Appropriate のような、やらなくてよい・エクスキューズの言葉はいらない。
- 政治家や実践者向けの言葉はまた異なる。魅力的な言葉が必要。
- ターゲットは、シンプルで短いほうが良い。
- 基本は残しつつ、ミッシングポイントやテーマを入れる必要がある。

- ガイド文書が必要。⇒ガイドラインは **One Off** ではなく、アップデートが重要だ。

コメント：2010 目標を打ち立てたけれど、失敗した。愛知ターゲット。繰り返していないか。なんで失敗したのかに結び付かなければならない。

## グループ 2 主流化と連携

### <主流化>

- 重要性については全員一致。主流化には、いろんなオプション選択肢があることが提案された
- EIA や SEA や **Spatial Planning**、**Strong Regulation** などの手法の重要性
- ポスト 2020 のすべての目標で主流化の行動が生まれるように、明確にしたりする必要がある。
- **Mainstreaming** が CBD ファミリー以外に知られているだろうか、という指摘。
- **Mainstreaming** をどうポスト 2020 にいられるだろうか。ターゲットではなく、ツールやメカニズムに入れられないか。他のセクターターゲットに入れる。オーバーアーキテクチャーや前文などで書き込むというアイディア
- **Mainstreaming** 目標を、**SMART** 目標にできるか、指標は何なのか？
- すべての企業・産業群に生物多様性の視点を入れるというワーディングがありうるか？

### <他のプロセスとの連携について>

- **SDG s** への注目を活用して、国内レベルでも実施が進む方法ができないか。
- ポスト 2020 を、**SDG s** の 2020 で失効(?) するものをアップデートするつもりで作る。
- ゴールだけではなく、2030 アジェンダにも言及することが重要 (**Leave No One Behind** などの原則もカバーすべき)
- レポートニングの共有。条約との目標の連携

## グループ 3 資源動員と生物多様性コミットメント

### <資源動員>

- 量的目標、明確な指標が必要。**SMART** であるべき。**GEF** やガバメントファンディングなどの伝統的なファンディングだけでなく、他のソースを考える必要がある。
- マーケットベースや、生物多様性オフセットなどの活用。
- 生態系サービスの価値評価が資源動員につながることもある
- ネガティブインセンティブをポジティブインセンティブに変えることなど
- ファイナンスだけでなく、人的なリソースや、技術的なリソースもカバーする必要がある
- 気候変動や **SDG s** も使って、**ECO-DRR** などのテーマなどを有効に活用して、開発系資金をこちらに誘導する必要がある。
- 戦略の開発に支援を行う。
- **GEF** だけでは不十分で、気候変動の事例を学ぶべき

### <生物多様性コミットメント>

- 目標やガイダンスが必要ではないか。どのようなコミットメントが期待されるかという点を明らかにするべき。
- **NDC for Nature**。補助金や行動変容などもカバーした方が良い。

## グループ 4 コミュニケーションと能力養成

### <コミュニケーション>

- グローバル、リージョナル、ナショナルレベルで考える必要。コミュニケーションパスウェイを意識したり、メッセージをシンプルにする必要がある。
- ローカルコミュニティーを含む、ターゲットオーディエンスを設定する必要がある。
- ポスト 2020 のコミュニケーションも重要だが、コミュニケーションに関するターゲット 1 の要素をポスト 2020 の目標としていれつつ、より、**SMART** にする必要がある。
- ターゲットオーディエンスの設定。
- コミュニケーションにもっと投資が必要。

### <キャパシティビルディング>

- 非常に重要な課題
- 多様なレベルでキャパシティビルディングが必要
- 指標も必要だが、どのようなものが考えられるか不明。
- 能力養成事業の効果も評価する必要
- 能力開発の蓄積評価（ストックテークのアセスメント）が重要ではないか。



### グループ 5 多様な視点の組み込み

<どう増加させるか、どうポスト 2020 の枠組み>

- 世界レベルのマンデートが進めるためのツールになる
- NBSAP や生物多様性の委員会のような組織を作って、統合を進める。
- プロセスの透明性の重要性。
- **inter-sectoral or cross-sectoral** 協働をハイライト。各国で有用なツールがある。
- 企業に最低限望むことなどを明確化する必要
- 投資家の巻き込みが重要
- プロセスへの参加と当事者意識の醸成が必要、
- フレームワークの文章だから、要素をキャプチャしつつ、どこまで細かく詳細を決めるかというバランスの問題がある。

### グループ 6 NBSAP とレビュー

<NBSAP>

- NBSAP は重要なツールであり、ポスト 2020 でも重要なツールとなるべき。
- NBSAP の有効性（課題や障害など）
  - 政治的な理解や意思が不十分（障害）
  - 国レベルでの資源が足りない（障害）
  - ローカルレベルでの生物多様性戦略が有効ではないか
  - コーディネーションメカニズムが不足していることも課題
  - ターゲットセッティングの仕方が分からないという指摘。
- 有効な手法
  - コーディネーションメカニズムが必要 ナショナルコミッティーなど
  - 国内実施のガイダンスなどがあってもよい
  - レビューメカニズムの改良
  - ラチェットメカニズム（生物多様性コミットメント）
  - コミュニティーベースモニタリングメカニズム
- ソフトローと他の条約のような厳格な仕組みについての意見。



## Transformative Change と愛知ターゲット

最終日は、

- ①トランスフォームと既存の枠組みというものの橋渡しとは何なのか？
- ②既存の枠組みについて何が成功で、何が課題だったかについて追加的な意見交換が行われた。



### グループディスカッションの成果

- 教育の領域にもっと力を。パリ協定と SDGS と CBD のシナジー。
- ファイナルスパートの重要性。社会経済発展との連続性、持続可能な利用に関する理解の向上  
目標 11 はいろんな人が関わられるようになった。ボトムアッププロセスの必要
- スケールアップ：集中的に取り組むべき領域があるという意見。生物多様性を他のセクターに主流化することの重要性。批判的な既存の戦略や実施の見直しが重要。
- 技術的な展開について検討。新しいパートナーシップの重要性。Non Government actor の重要性。パフォーマンス指標とインプット指標の使い分け。地域の人々による保全の取り組みの認識。生態系ベースアプローチ。ジェンダーが次のフレームワークに入るべき。メジャーグループ&ステークホルダーの視点。NBSAP の重要性と、強いアカウンタビリティの重要性。
- 生物多様性が気候変動に貢献するという点についてももっとエビデンスを出していく必要。
- ドラマティックチェンジは必要ない。できていないことに焦点。メインドライバーにフォーカスすべきでは。既存の目標は十分アンビシャスである。マインドセットの変化。マーケットメッセージから、認証製品やエコツーリズム。生物多様性からのメッセージではなく、他のセクターからメッセージを出してもらおうような仕掛け。教育の重要性。コマネジメント。課題は、資金。新しい技術を使いこなす。

### まとめ

#### Wrap-up

#### イベント全体の評価

- 非常に満足のいく会合で、参加型で良かったという声が非常に多く出た
- すでに取り組まれているものは何か、何がアップデートが必要か、何が新しい取り組みなのかなどの分析をすると様々な議論にフォーカスできる
- 生物多様性コミットメントは、非常に重要なツールだと思うが、そのアイディアの効果を最大限にして、リスクや課題を最小化するためにも、第 2 回 OEWG ぐらいで何らかの合意に到達して、国際社会に提案する必要があるのではないか。
- 中国 ホストの日本と愛知県に感謝。CBD 事務局と相談して、ポスト 2020 に関するイベントを実施したい。
- NGO:第 6 次国別報告書、まだ、アジアから出されているのが限られており、GBO5 に非常に大きな影響を及ぼす。

- IPLC：参加させてくれて感謝。アジアの IPLC も生物多様性に深くかかわっており、相互の理解を深めながら今後進めてほしい。
- FAO:事務局とホストに感謝。FAO としてもこのプロセスをサポートしたい。
- ASEAN：アジア太平洋は非常に多様な地域である。それぞれのサブリージョンでも様々な課題があり、議論を深める。ASEAN リーダーサミットをタイで開催するが、それぞれのアリーナでも議論をする必要がある。
- その他各国からの謝意の表明とさらなる議論を深めることについての期待が述べられた。

#### 共同議長の振り返り

- バジール：地域コンサルテーションのフォーマットづくりからご協力をいただいた形、満足しない部分もあるかもしれないが、一方で大きなアドバンテージである。オンラインコンサルテーションもこれから始まるので協力してほしい。OEWG も夏に始まる。フォーマルミーティングと同時に、テーマ別ミーティングも進むためそちらにも参加してほしい。インプットが欲しい。アジア地域の多様性を相互に理解できたと思う。2 日は非常に活発に議論したがこれはあくまでもスタートである。
- フランソワ：2 週間前にやっと、同プロセスやワークショップを進めるかななどを議論した。やっと動き始めたという時間を持っている。いつも、私の周りにポスト 2020 という重責が肩に乗っている。まとめ上げ、中国の皆さんに良いものを引き渡したい



最後に、共同議長、環境省、愛知県、CBD 事務局からの挨拶が行われた。